

考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究

著者	渡辺 芳郎
別言語のタイトル	Fundamental Studies into the Restructuring of Research on Satsuma Ware in the Early Modern Period from Cooperation between Archaeology and Geophysical Exploration
URL	http://hdl.handle.net/10232/14619

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 2日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520772

研究課題名（和文）考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究
 研究課題名（英文）Fundamental Studies into the Restructuring of Research on Satsuma Ware in the Early Modern Period from Cooperation between Archaeology and Geophysical Exploration

研究代表者

渡辺 芳郎（WATANABE YOSHIRO）

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：10210965

研究成果の概要（和文）：

本研究では、近世薩摩焼の考古学的研究の再構築をはかるとともに、近世窯跡の考古学的調査に地下探査を組み込んだ調査方法の確立を目的とした。鹿児島県日置市美山・苗代川窯跡群において事前に地下探査を行い、調査地点を選定した上で発掘調査を実施した結果、地表面からは窯体が視認できない地点において窯体を確認することができた。近世薩摩焼研究に大きな成果をあげるとともに、近世窯跡における地下探査の有効性を実証した。

研究成果の概要（英文）：The objectives of this research were to redefine archaeological research on Satsuma ware in the early modern period as well as establish a systematic survey method for kiln sites from the same period using geophysical exploration. Excavation at a site, which had been chosen using geophysical exploration, at the Naeshirogawa kiln sites in Miyama (Hioki, Kagoshima Prefecture) resulted in a kiln being discovered that could not have been confirmed visually from the surface. This result is not only important for research on Satsuma ware in the early modern period but also in demonstrating the effectiveness of using geophysical exploration at kiln sites from the same period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：薩摩焼・近世窯跡・地下探査

1. 研究開始当初の背景

近世薩摩焼の考古学的研究は、1941年の『薩摩焼の研究』（田沢・小山1941）刊行以後、約半世紀に渡って停滞していたが、1990年代に入り、窯跡の発掘調査事例が増加し、

大きく進展しつつある（関編1995『山元古窯跡』など）。そのうち苗代川系窯場（現日置市美山）は近世薩摩焼の主要窯場のひとつで、同窯場で生産された甕・壺・播鉢などは

藩内に広く流通し、消費地遺跡の年代推定に有効な手がかりとなり、また近世後期以後の土瓶は、「薩摩土瓶」の名の下に広く全国に流通した。幕末には金襴手薩摩を生産し、欧米に輸出された。苗代川は近世薩摩焼の歴史を考える上で欠くことのできない窯場である。

しかし同地域の近世窯跡の発掘調査は、17世紀の堂平窯跡1例（関・繁昌編2006『堂平窯跡』）にとどまっております、その内容ははっきりと明らかにされているとは言えない。また堂平窯跡の調査結果は、『薩摩焼の研究』において提示されていた苗代川観を根底から再検討することを迫っており、苗代川の歴史については、これまでの仮説をいったん白紙に戻して検討することが必要である。

これまで渡辺は、2006年から苗代川窯跡群において継続的に分布調査・測量調査を実施しており、その成果を公表することで、基礎データを蓄積しつつある。

一方、金田は、磁気探査・レーダ探査などを全国的に実施しており、地下埋蔵物の探査に大きな成果をあげているが（金田・西村編2007『埋蔵文化財ニュース12 遺跡探査の実際』）、これまで中近世については、城郭調査で成果を挙げているものの、近世窯跡については、岡山県備前窯跡の事例などごく少数である（西村2003「伊部南大窯の探査」『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書1』）。

しかし近世は窯業地が爆発的に増加する時代であり、その技術・製品内容も多様である。そのため、多様な窯跡に対する基礎的データの蓄積が必要不可欠である。苗代川窯跡群は、日本の近世窯業地を代表する窯跡群のひとつである。これまで金田と渡辺の共同研究により、単室登窯と連房式登窯の判別が可能であることが指摘されているが（金田・渡辺2008「薩摩焼の生まれたところ」『日本文

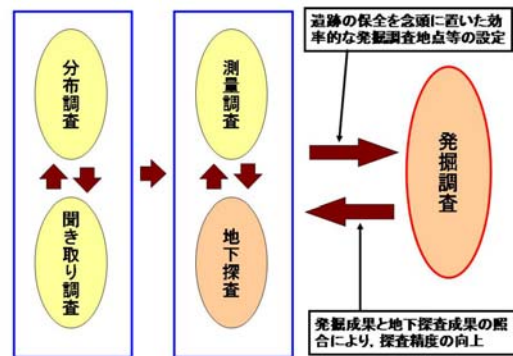
化財科学会第25回大会研究発表要旨集』）、それを考古学的発掘調査により検証する必要がある。地下探査成果と発掘調査成果を相互に比較参照することで、より精度の高い探査成果の解読が可能になる。

窯跡の調査は、これまで分布調査→測量調査→発掘調査という調査方法が一般的であった。しかし発掘調査は、遺跡の損壊を前提とするため、その調査地点の選定・発掘方法の選択において、慎重さ・厳密さが求められる。測量調査と発掘調査とともに、地下探査を実施することにより、発掘前に地下の窯構造やその形態・規模が推測可能になり、発掘調査のための重要な事前情報を取得することが可能になる。さらには、遺跡の損壊を最小限にとどめ、遺跡の保全を含めた中・長期的な遺跡保護にとっても有効である。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の2点のための基礎研究である。

- (1) 考古学による近世薩摩焼研究の再構築
- (2) 地下探査を取り入れた近世窯業遺跡の体系的調査方法の確立



薩摩焼を生産した近世窯場として全国的に有名であるが、これまで考古学的な発掘調査がきわめて少なかった苗代川窯跡群（鹿児島県日置市美山）に対して、考古学的な発掘調査を実施することで、その技術・製品の具体相を明らかにする。

また地下探査と協同することで、分布調査→測量調査→発掘調査という一般的な近世窯跡の調査研究方法をより効率化・精密化するための方法論確立の基礎研究を行う。

苗代川は、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592-98年）の際に連れてこられた朝鮮陶工によってはじめた近世窯場であり、甕・壺・摺鉢・土瓶など、いわゆる「黒薩摩」の生産、および幕末～明治にかけて海外輸出された金襴手薩摩の生産で有名であるが、その考古学的調査は、17世紀の堂平窯跡1例にとどまっており、その実態はいまだ不明な点が多い。そこで本研究では、18世紀以後と推測される窯跡を選択し、発掘調査し、その窯構造などの製陶技術の実態とその変化を明らかにすることを目的とする。

また発掘調査の前に地下探査（レーダ探査・磁気探査・電気探査）を実施し、事前に地下埋蔵の窯構造・規模についての情報を取得することで、より効率的かつ精密な調査地点および調査方法の選択を行う。そして地下探査データと測量調査・発掘調査データを照合することで、地下探査データのより精密な解読を可能にするための基礎情報を取得する。これら異なる方法による情報の相互参照により、近世窯跡の調査研究方法をより効率化・精密化するための方法論の確立に資することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、これまでに実施してきた鹿児島県日置市美山・苗代川窯跡群における分布調査・測量調査の成果を元に、まず窯跡が存在すると推測される地点において地下探査

（レーダ探査・磁気探査・電気探査）を実施し、その探査成果に基づきながら、発掘調査地点を設定し、発掘を実施する。

その上で、事前の地下探査成果と発掘調査

成果とを照合することで、地下探査情報がどの程度、実際の埋蔵物の実態を示しているかを検証することで、地下探査の近世窯跡調査における有効性を検証する。

具体的には苗代川窯跡群のうち、B02地点と呼んでいる窯跡推定地点および南京皿山窯跡という幕末の磁器窯跡における日置市史跡指定地範囲外を選定し、地下探査を実施し、また後者において発掘調査を実施した。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の7点にまとめることができる。

(1) 南京皿山窯跡は、1・2号窯跡ともに、日置市指定地外においても窯体が残存していることが確認できた。このことは、史跡指定地範囲を決定する際に、より詳細な情報収集が必要であることを示している。

(2) 1号窯跡は燃焼室が検出され、全長約30m、燃焼室+焼成室6～7室の扇形連房式登窯である可能性が高い。

(3) 2号窯跡は焼成室の一部が検出され、全長25m以上、焼成室7室以上の連房式登窯である可能性が高い。

(4) 1号窯跡の燃焼室奥壁構築方法および2号窯跡の焼成室火床境構造は、平佐焼窯跡群の窯構造との類似性が見られ、文献が伝えるように技術者の移動をともなう技術交流があったと推測される。ただしそれは双方向的なものであった可能性もある。

(5) 物理探査の結果、B02地点には全長約30mの単室登窯が埋没している可能性が高い。

(6) 発掘・測量調査および物理探査の結果から、苗代川における単室登窯は、その初現期16世紀末から幕末まで斉一性の高い規模・構造を保持していたと考えられる。

(7) 南京皿山窯跡における発掘調査の結果と、事前に実施した物理探査の結果は整合し、ま

た B02 地点における成果から、物理探査が近世窯跡の調査にとって、きわめて有効であることが実証された。

また南京皿山窯跡を発掘調査中に、遺跡見学会を開催し、市民に広く調査成果を公開した(2011年1月9日。約70名参加)。さらに最終年度において報告書を作成することで、本研究成果を公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

(1) 渡辺芳郎 「窯跡資料からわかることー近世薩摩焼の焼成技術ー」『やきものづくりの考古学ー鹿児島県の縄文土器から薩摩焼までー』 pp. 18-37 2011年10月 鹿児島大学総合研究博物館(査読無)

(2) 渡辺芳郎 「鹿児島県日置市美山南京皿山窯跡採集の磁土製匣鉢」『考古学と陶磁史学ー佐々木達夫先生退職記念論文集』 pp. 83-93 2011年2月 金沢大学考古学研究室(査読無)

[学会発表] (計2件)

(1) 金田明大・渡辺芳郎・西口和彦 「近世窯業遺跡における探査と発掘の連携ー美山苗代川窯跡群における実践ー」日本文化財科学会第28回つくば大会(於 筑波大学) 2011年6月11・12日

(2) 渡辺芳郎・金田明大 「日置市美山・苗代川窯跡群の調査ー南京皿山窯跡の発掘調査成果を中心にー」第57回鹿大史学会大会(於 鹿児島大学) 2011年2月5日

[図書] (計1件)

(1) 渡辺芳郎・金田明大 『考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究』平成21～23年度科学研究費

補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 2012年3月 鹿児島大学法文学部(総76ページ, 金田: pp. 16-24, pp. 28-30, pp. 35-37, p. 66,ほか: 渡辺)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 芳郎 (WATANABE YOSHIRO)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号: 10210965

(2) 研究分担者

金田 明大 (KANEDA AKIHIRO)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・主任研究員
研究者番号: 20290934